

# 国木田独歩の佐伯での生活

(八)

山内武麒麟

(賛助会員・佐伯市城下東町)

七日の記には、この六日の登山記の続きで帰途乗った木立おろしのことを記してある。

十二段から帰路また木立おろしに乗った。船頭はたゞ独歩兄弟二人のために船を出してくれた。舟の中でこの船頭の身の上話を聞き、色々と想像している。

此船頭は先きの船頭とは別人なり。されど等しく老人なり。夕陽己に斜に秋の晴天を照らすに当り、船ゆるやかに河流をわたる、船頭嘗て長崎に在りて黒船を造りたる事ありと自から語る、其述懐は人をして人生の経過を思はしむ。

と、船頭の話聞いて色々と想像している。

自分はこの老人を忘れることは出来ない。何故なら彼を一個のソールとしてこの天地間に於ける人間の生涯を

送っているからである。この老翁の一生でも必ず深い物語があるに違いない。彼はどうして船大工になったのか、彼の子供時代はどんなであったか、彼の親はどんなか。彼が長崎にいたころはどんな生活をしていたか。彼はどうして帰国したのか。彼に妻はないのか、子供はないのか。今いるのだろうか。彼の一生の悲しみや喜びはどうか。と、この老船頭の身の上を色々想像し、

此一個の翁と雖も必ず大なる物語ある可し。嗚呼此の老人が一生は如何なる生命なるぞ。

と、深く同情している。

そして以上元越登山をふり返って

回想すれば一昨日の遠行は一個の詩なり。美なる哉、自然而して其間に多の此自然と調和する人間を見たり。

老樵夫、老船頭、多くの農夫、皆な美しき配合を吾が  
想像の裡に形づくる也。

と、心から満足し、よい勉強になったと省み心から喜んで  
いる。

#### 八日の記

秋雲、十二段の峰をかすめて四面の風物暗惨たる色  
ありけり。雨終に降り来りぬ。されど今已に止みて天  
何時の間にか晴れ満空の星彩ひとしほあきらかなり。  
と、変り易い秋の空模様を描写して

今日は水曜である。祈祷会に出席する。校務に従事す  
ることいつもと変りなしと記して自己反省をしている。

自分のこの頃の境遇は決して幸福であるとは言えない。  
美なる自然に接し、目新しき生活を見て大に得る処  
あるには相違なけれども、校務の為に専ら文学者として  
の天職の為に十分勉強用意するのひま少なき事  
は吾に取りて尤も不幸と言はざる可からず。

と、自分の天職としている文学の研究が校務のため充分  
出来ないのが不幸だとこぼしている。しかし、また  
心はあせるが暇がないのでどうしようもない。しかし

この不幸らしく見えるが、神はきつと自分のために結極  
は幸せにしてくれると信じるので、ただ自分は努力する  
だけ努力すればよい。と、思い直している。

#### 九日の記

あい変らず読書の時間が少ない。今日はただ竹越氏著  
のマコーレー伝を少し読んだだけである。しかし読書の  
時間が少ないと言っても自分の心に感じることは少なく  
ない。自分の信仰と感情とは次第に進みつゝある。と省  
みている。

次に「吾人間を重じ人生を信ずるが故に固より人間の  
事実を貴ぶ也」と書いて、事実について論じている。

事実はどこまでも事実である。歴史は事実を記載した  
ものとして重じなければならぬ。伝記も人の事実の記  
載として重じなければならぬ。しかし自分は不審に  
思うことがある。それは歴史を重んじる人達の中に理想  
を軽ろんじ哲理をいやしみ、これらを空想であると言  
う人達があることである。

自分には歴史的事実だけが事実とは思わない。理想も  
事実である。想像も事実である。人間がその心を働かす

事実である。天地の間のことはみんな事実である。自分には事実とは大きな言葉である。と、事実を責ぶべきことを述べてある。

## 十二日 日曜日の記

十日十一日忽ち過ぎぬ

吾何を為せしか、吾何を感じしか。吾幾何の進歩をなせしか

と、自分を省みて、

日は去りまた来る。夜は明けてまた暮れる。毎日することはいつも同じである。希望は夢のようで、信仰は煙のようである。この夢に満足し、煙に安心している。日夜夢を追ひ煙の中に入りしている。結局どうなるのか。

瞑想して人類の事を想像し、沈思して自然の事を考え生を思い死を思う。考え想像してやまない。止まないながら、平然としていられるのは何故か。

自分は弱いのである。だから熱中することが出来ない。自分は愚かである。だからすぐ怠けすぐ忘れる。だから得意でいる。

と、強く自責している。が、また、

しかし自分は人類と自然とを忘れることは出来ない。自分は人間であることを忘れることは出来ない。と思ひ返して

彼今や一度瞑想すれば、人類を直ちに此大自然の中に見出すなり。彼自らを人類の一個として見出すなり。又た自らを直ちに自然、此不思議、無窮、無限なる自然の中に見出す也。

と、自己を取戻し、自分は最早自然と人間とを関係なく思うことは出来ない。人の情を忘れることは出来ない。そして愛と美と真の法則は神にあると信じる。

「靈魂不死」を絶対に信じる。永久の生命を信じて疑わない。もう死をおそれない。

と、心の中に確く信じている。

## 十四日の記

死という法則が自分の上にも諸々の人の上にも厳格に行われつゝある事実に対しておそれおのくのは当然のことである。無窮の時と無辺の空間をもって現はれているこの大自然の中に、自分は厳然としてある。仰ぐと無数の星がぎらぎらと輝きその美しく神秘である。夜は暗

闇を持って来り、朝は光を運ぶ。

そして人類はその自然の中にあり、代々続いてきれることはない。累々と並ぶ墳墓はさわがしい世間の上に立っている。何を意味しているのか。

今日も来りぬ。嗚呼今日も来りぬ。今日の如く明日も来る可し。明日の如く明々日も来る可し。日は登り日は沈み、星現はれ又星消へ、雲わき雨降り、雨止みて日輝く。変化あるが如くして遂に少しの変化なきモノトミイ（単調）の宇宙に寄する生も亦モノトミイなる哉

と、自然と人間との関係を考え、

人間！とは不思議千万なものである。人間にとって人間ほど不思議なものはない。また人間程大きな意味をもつものはないだろう。

人情「ヒュマニテイ」と自然とが何の関係もないものであれば信仰は起らないであろう。自分は人の情を信じる。また大自然の美妙は神に帰するものであるから神聖なものとして信じる。

と、人間と自然との調和を重大に考えている。

次に

昨日午後、牛つぼ村を探検す。此村の奥に墓地あり、

山の谷間に在り。古墳累々として並ぶ。古るき者は白苔之を覆ひ刻字を埋む。嗚呼、此村！此の村！此村の人人！此墳墓！吾れには大なる黙示の如し。

と、臼坪村の奥の墓地を探て、その感想を書いてある。自分の立つところは宇宙であつて、自分は人である。

嗚呼吾は人にして茲は宇宙なり。この事実があらゆる事実の中で最初の事実ではないか。

宇宙なり。茲は宇宙なり而して吾は人なり。嗚呼此の恐ろしき事実より吾を救ふ者は只た神の信仰。義務の念、永遠の生命なる哉

と、神への信仰を説いている。

次に「眠に就くに當りて今日の事を記す可し。感情を記す可し。事実と思想とを記さん。」と、ある。この「欺かざるの記」は表紙の表題に「欺かざるの記」と書いて、その横に事実、思想、感情と添書してあるように一日中にあつたこと、浮んだ思想、心に湧いた感情を赤裸々に書きしめたのである。

次に午前は下見をして午後校務があり、愛山氏の『荻生徂徠』を読み始めた。夜は校務を終えて帰り、荻生徂

徠を読み、ウォーズワースの詩逍遙遊を読んだ。と一日のことを簡単に記してある。

午前中に授業の下調べをし、午後の授業を終えて帰って読書し、夜はまた八時半から十時半までの授業をして帰ると、また読書している。眠るのは十二時頃であろう。独歩の真面目な人柄とその勉強ぶりを察することができ

る。

そして次にまた「事実」について論じてある。

「事実」をこの天地間、即ち人間の住む自然の外界に於ける事実として感じ得るようになれば大きな進歩である。どんな知識もどんな事実も、この感じがなくては心の中に入って来てもそれは空でありまぼろしである。自分は今少しずつこの感じをもつようになった。これは確かに進歩である。

事実をこの大自然界に於ける事実として見る事が出来るならば、この美しい自然、月あり花あり星あり水ある自然と、イエス若しくはマイケルの存在したと言う事実との間に必ず微妙な調和がなくてはならない。

事実。然り。此の感を以てして而して凡ての事を観て対照黙考せよ。得る処あるや必せり。

と、確信し、

最先に自分の存在は事実である。この宇宙は事実であると言うことである。

次にこの宇宙の法則は不思議であり、その無限永久であることが事実であることである。

人間が死ぬのは事実である。生れた者は死ぬのは事実である。生れて人間と言う。故に生と死は人間最初の事実である。

歴史は事実である。

百姓、山民、村人は事実である。英雄、偉人は事実である。

事実！事実と追うならば無数の事実がある。これらの事実を対照して考えると、そこに大感情、大思想、大信仰若しくは大失望のものがあ

と、事実の重大性を論じてある。

十五日の記にも事実について論じてあるがその中に人間の心を動かす美の力、善の力、また人間の情を動かす色々な現象の事実を重要視すべきことを述べて

美なるかな星！汝は人間の頭上に巖然としたしかに

輝きつゝあるなり。美なるかな花。あさましきかな恋の情。人間人生が事実にして天地が事実にして、人生が希望にして、宇宙が進化して、永遠の命は大事業にして、神の存在神の愛が大事業たる以上は大に吾が命を樂み、人事を樂み、深く觀んことを希ひ、深く思はんことを希ふ也。と、強く希望している。(未完)



## 村史編さん資料の収集について

——主に高橋玄策のこと——

高 宮 昭 夫

(会員・米水津村浦代)

五月一日付で村史編さん事務局長になったので、この機会に故郷をもっと探究してみたいと思う。

米水津村は県下でも数少ない未合併町村である。未合併町村は私の知る限りでは、前・中・上津江、大山、上浦、姫島と米水津村の七町村しかない。

米水津村は明治二十二年四月町村制が施行され、昭和六十四年三月で百年を迎えることになるが、その記念事業としての村史発刊である。昨年より市野瀬仁先生にご足労を願っているが、とにかく大変である。中でも資料の収集に一苦勞する。